

## 「貨幣は必ず金でなければならない」か?

——マルクス「価値尺度」論の一解釈によせて——

松 田 清

目 次

はしがき

〔I〕 飯田繁氏の所説

〔II〕 価値の尺度と交換価値の尺度

むすび

### は し が き

周知のようにマル経貨幣論においては、「貨幣は必ず金でなければならない」という命題が、一種の定理として扱われている。例えば、飯田繁氏はこう言われているのである。すなわち、「金と貨幣との関係視点については、マルキシズムに周知の一命題がある。“金は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金でなければならない”，というのがそれである。」<sup>1)</sup>と。その場合飯田氏は、「金銀は生まれながらに貨幣ではないが、貨幣は生まれながらに金銀である」<sup>2)</sup>というマルクスの命題と、「金は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金でなければならない」という氏の命題とを同等のものとみなされているわけである<sup>3)</sup>が、マルクス自身が述べて

いるように、「『金銀は生来貨幣なのではないが、貨幣は生来金銀である』ということは、金銀の自然属性が貨幣の諸機能に適しているということを示している」<sup>4)</sup>にすぎないのであって、それ以上でもそれ以下でもないのである。にもかかわらず、そんなことは先刻御承知の上で飯田氏がマルクスの命題と氏の命題とを同等とみなされるのは、「労働生産物が商品形態をとるかぎり、したがってまた、商品の貨幣形態——貨幣が存続するかぎり、貨幣はあくまでも金でなければならない、いいかえれば、金は貨幣の王座をけっしてさらない（いわゆる“金の廃貨”はけっしておこらない）、というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ」<sup>5)</sup>と確信されているからにはほかならない。そしてそうした確信が共有されているからこそ、マル経貨幣論においては、「貨幣は必ず金でなければならない」という命題が疑問の余地なき定理として扱われているのである。

れども、貨幣は本来的に金・銀である』（“金〔銀〕は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金〔銀〕でなければならない”）というマルクスの命題（飯田、前掲書、38ページ）。「金は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金である」というマルクスの命題（同前、41ページ）。

1) 飯田 繁『マルクス紙幣理論の体系』日本評論社、1970年、13ページ。

2) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 13, S. 131. カール・マルクス『経済学批判』、『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻所収（杉本俊郎訳）、132ページ。以下本書から引用する場合には、*Kritik* と略記し、*Werke* 版原書のページ数とともに各引用文の末尾に付記する（訳文はすべて邦訳『全集』版の杉本俊郎氏の訳による）。

3) 「『金・銀は本来的に貨幣である、のではないけ

4) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, 1. Band, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 23, S. 104. カール・マルクス『資本論』第1巻、『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻所収（岡崎次郎訳）、119ページ。以下本書から引用する場合には、*K. I* と略記し、*Werke* 版原書のページ数とともに各引用文の末尾に付記する（訳文はすべて邦訳『全集』版の岡崎次郎氏の訳による）。

5) 飯田、前掲書、14ページ。傍点一飯田氏。

だが、「貨幣は必ず金でなければならない」という命題は、本当に「マルクス貨幣理論の帰結なのだ」だろうか？ 私にはどうもそうだとは思われない。「貨幣は必ず金でなければならない」という命題と「マルクス貨幣理論の帰結」との間には、「金銀は生まれながらに貨幣ではないが、貨幣は生まれながらに金銀である」というマルクスの命題と「金は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金でなければならない」という飯田氏の命題との間の隔たりとちょうど同じくらいの隔たりがあるように思われてならないのである。そこで私は以下において、飯田繁氏の所説の検討を手掛りに、「マルクスの貨幣理論からすれば、まこと貨幣は必ず金でなければならないか？」ということ、を改めて問い直してみることにしたい。

## 〔Ⅰ〕飯田繁氏の所説

いまま見たように、飯田氏は、「労働生産物が商品形態をとるかぎり貨幣はあくまでも金でなければならない」というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ、と主張されているのであるが、そう主張される根拠について氏は次のように述べられている。

『資本論』や『経済学批判』の理論的な叙述段階・現実的な歴史段階のもとでは、げんじつの金によってしかはたされえないものとされた蓄蔵貨幣機能や世界貨幣機能さえもが、こんにちでは部分的に国内的・国際的な信用制度のそれぞれの手段・方法によって代行され、金の貨幣機能は制限され・圧縮され・効率化され（つまり、金そのものが節約され）なければならないことになった。それでもなお、金いがいのものによってはさいごまで代行されえないところの、すなわち、価値そのもの・一般的等価形態としての金によってしかおこなわれえないところの・貨幣機能は価値尺度機能だ。金が観念的な金として演ずるこの機能こそは、古典的な金本位制度を離脱した現代の貨幣がどうしてもどうしても

やはり金でなければならない——げんに流通する通貨（通俗的には『貨幣』とよばれるところのもの）は、じつはしんの貨幣としての金の代用物にすぎない——というマルクス貨幣理論的な考えかたの論理的・現実的根拠なのである。<sup>6)</sup>

見られるように、飯田氏は、「現代の貨幣がどうしてもどうしてもやはり金でなければならない」というマルクス貨幣理論的な考えかたの論理的・現実的根拠として、「金いがいのものによってはさいごまで代行されえないところの、すなわち、価値そのもの・一般的等価形態としての金によってしかおこなわれえないところの・貨幣機能」＝価値尺度機能を挙げられるわけであるが、こうして言われていることを私なりに要約してみれば、次のようになるであろう。すなわち、「金の価値尺度機能は「金いがいのものによってはさいごまで代行されえない」のだから、金がいったん「貨幣の王座」に着いたが最後、金はその座を去りえない」と。しかし、それでもなお不明な点が残っている。まず第1に、金の価値尺度機能は「金いがいのものによってはさいごまで代行されえない」とされる根拠は、いったい何なのか？ 第2に、仮に金の価値尺度機能が「金いがいのものによってはさいごまで代行されえない」としても、そのことがなぜ金が「貨幣の王座」を去らない理由になるのか？

第1の疑問点については、飯田氏は次のように答えておられる。

「では、金そのものによってあくまでもおこなわれなければならない、その〔まさに貨幣を貨幣たらしめている最重要な〕貨幣機能とはいったいなになのか。貨幣の価値尺度機能→価格標準機能がそれである。価値尺度機能→価格標準機能をはたしうるものは、それじたい十分価値をもつ特定の商品＝一般的等価形態としての貨幣そのものでなければならないのだからである。』<sup>7)</sup>

6) 同前。傍点—飯田氏。

7) 同前、42—43ページ。傍点—飯田氏。〔 〕内—引用者。

こうして飯田氏は、金の価値尺度機能は「金  
いがいのものによってはさいごまで代行されえ  
ない」とされる根拠を、貨幣の価値尺度機能は  
「それじたい十分価値をもつ特定の一商品」そ  
のものによってはしか果たされえない、という点  
に見出されているわけであるが、それで問題が  
片づいたわけではない。と言うのは、貨幣の価  
値尺度機能は「それじたい十分価値をもつ特定  
の一商品」そのものによってはしか果たされえな  
い、とされるその根拠が今度は問われなければ  
ならないからである。それはまた、いったい飯  
田氏は貨幣の価値尺度機能をどう理解されてい  
るのか、という問題でもあるが、その点につい  
て、飯田氏は次のように述べておられる。

「貨幣・金（商品社会のもとでの）はもと  
もと商品として流通していたところの、完全  
価値をになうひとつの特殊な使用価値であっ  
たればこそ、その特殊な使用価値（自然的素  
材・金量）で諸商品価値を一般的に表現する  
材料ともなりえたのだったが、その単位貨幣  
量の価値（分母）で諸商品の価値（分子）を  
量的に測定・尺度することによって、諸商品  
の価値量は一定貨幣・金量（商）で表現さ  
れ、形態化（価値形態に転化）する。」<sup>8)</sup>

見られるとおり飯田氏は、諸商品の価格は諸  
商品の価値量を貨幣1単位の価値量で除すこと  
によって与えられるものと解され、そのように  
“諸商品の価値量を測定するための尺度”とな  
ることを以て貨幣の価値尺度の機能とされるわ  
けだ。なるほど、まこと貨幣の価値尺度機能が  
“諸商品の価値量を測定するための尺度”たる  
ことにあるのだとすれば、“価値尺度機能を果  
たしうるものは、それ自体十分価値をもつ特定  
の一商品でなければならない”と主張されて然  
るべきなのかもしれない。さすればまた、飯田  
氏の所説にも筋が通ることになるのであろう。  
“貨幣を貨幣たらしめる機能は価値尺度機能で  
ある→価値尺度機能を果たしうるものはそれ自  
体十分価値をもつ特定の一商品だけである→貨

幣は必ず特定の一商品でなければならない→貨  
幣が必ず特定の一商品でなければならない以上  
歴史的必然として<sup>9)</sup> 貨幣は必ず金でなければな  
らない”，というふうに。

生憎なことに、しかし、それではただ問題が  
別の点に移っただけのことにすぎない。と言う  
のは、「商品価値は、価値尺度としての貨幣・  
金の価値で測定（評価・秤量）されることによ  
って、この価値を内包する貨幣・金の重量（使  
用価値量）で表現されることになるのだ。」<sup>10)</sup>  
というような価値尺度理解に対しては、当然、  
直ちに次の如き問が發せられうるからである。

9) 「“貨幣が必ず金でなければならない”のは、一  
般的等価形態としての貨幣の社会的機能をはたす  
のになぜかもっともすぐれた自然的属性（不滅性  
・質的統一—分割・融合性、大量労働含有—携行  
性、などなど）を金がたまたまもちあわせている  
ことにもとづいている。」（飯田『マルクス紙幣理  
論の体系』、39ページ。傍点—飯田氏。）「“貨幣→  
金”の歴史的必然性の論理」（同前、41ページ参  
照。）

10) 飯田 繁『貨幣・物価の経済理論』新評論、  
1983年、32ページ。因に、下平尾勲・建部正義両  
氏も以下の如く同一の見解を示されている。

「すべての商品は全体の中から一商品（金）を  
排除し、この排除された商品（金）の価値で、諸  
商品価値量が測定されることによってはじめ、  
諸商品の価値量はそれと等しい価値量をもつ排除  
された一商品（金）の分量名で表現される。」（下  
平尾勲『貨幣と信用』新評論、1974年、115ペー  
ジ。傍点—下平尾氏。）

「マルクスが教えるように、貨幣とは、商品世  
界の内部で一般的等価の役割を独占的機能として  
演ずることが社会的に承認された特定の商品にほ  
かならない。そして、それは、商品世界にその価  
値表現の材料を提供することを第1の、したがっ  
てまたもっとも本質的な機能としている。だから、  
それは、なによりもまず、それ自身が価値をも  
つ商品でなければならない。なぜならば、ほん  
らい、価値をもたないものが価値を測定したり表  
現したりすることは、不合理であり、不可能なこ  
とだからである。」（建部正義『管理通貨制度と現  
代』新評論、1980年、81ページ。傍点—引用者。）

両氏ともしかし、価値を測定するなどというこ  
とがいかにして可能なのか、ということについて  
は一言もされていない。

8) 飯田 繁『マルクス貨幣理論の研究』新評論、  
1982年、28ページ。

すなわち、貨幣の価値量を尺度として諸商品の価値量を測定するなどということは、現実問題としていったいどうして可能なのか、と。たとい単純流通を想定しようとも、そこにおける現実の具体的な価格を問題にする限りでは（ましてや今日の現実の価格を問題にすればなおさら）、そうした価格が貨幣の価値量を尺度として諸商品の価値量を測定し表現したものだと主張しうるマルクス経済学者は、よもあるまい。それは飯田氏とて同じはずなのである。とすれば飯田氏も、現実の具体的な関係の中では、貨幣は飯田氏の言われるような意味での価値尺度機能を果たしていない<sup>11)</sup>、ということ認められざるをえまい。とすればまた、飯田氏は、現実の具体的な関係の中では存在しない「価値尺度機能」なるものを根拠に、“現代の貨幣はどうしてもこうしてもやはり金でなければならない”と主張されているにすぎないのだ、ということにならざるをえないのである。

他方、先に挙げた第2の疑問点については、飯田氏は直接には何も語られていない。けれども、飯田氏が次のように言われるとき、第2の疑問点に事実上答えられているとみてよいであろう。

「貨幣の価値尺度機能なしには、諸商品の価値は価格の形態・金量（観念的金量）の形態には転化されえないし、また貨幣の価格標準機能なしには、その金量の形態は国別の貨幣名（円・ドル・ポンドなどの）をもつことができない。ところで、金いがいの代用物が流通するさいの貨幣名だって、じつはけっしてその代用物の、ではなく、あくまでも金（金量）そのものの、貨幣名なのだ。」<sup>12)</sup>

つまり飯田氏は、金の価値尺度機能が「金いがいのものよってはいさごまで代行されえない」ということが、なぜ、金が「貨幣の王座」を去らない理由になるのか、という問に（事実上）答えて、およそ価格のある限り、そこには

金の価値尺度機能が働いているのであり（←「貨幣の価値尺度機能なしには、諸商品の価値は価格の形態・金量（観念的金量）の形態に転化されえない」）、その金の価値尺度機能が「金いがいのものよってはいさごまで代行されえない」ものとなれば、およそ価格のある限り、金が「貨幣の王座」を去りえないのは当然だ、と言われているのである。あるいは、飯田氏にとっては事はもっと簡単なのかもしれない。と言うのは、結局のところ飯田氏の推論は、“価格とは諸商品の価値の金量形態である”という定義に立脚しているにすぎないからである。たしかに、価格が無条件にかく定義しうるものであるならば、何もとやかく言うことはないのであって、現代もなお価格がある以上、「現代の貨幣がどうしてもこうしてもやはり金でなければならない」ということは、定義上自明のことではないのである。けれども、はなはだ遺憾なことに、“価格とは諸商品の価値の金量形態である”という定義は、それ自身の内にすでに、貨幣は金であるという前提を含んでいるのである。しかもそれだけではない。

上の引用文に見るように、飯田氏は「貨幣の価値尺度機能なしには、諸商品の価値は価格の形態・金量（観念的金量）の形態に転化されえない」と言われるのであるが、では、貨幣の価値尺度機能があれば、諸商品の価値はどうやって価格の形態に転化されうるというのであろうか。先にも見たとおり飯田氏は、“商品価値は、価値尺度としての貨幣の価値で測定されること（商品の価値量÷貨幣1単位の価値量）によって、この価値を内包する貨幣・金の分量（前出の割算の商）で表現される”と言われるのである<sup>13)</sup>。だが、その“いかにして”が示される

13) これに対して通説的価値尺度論では、「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」（三宅義夫「貨幣の諸機能」《遊部久蔵他編『資本論講座 1』青木書店、1963年、所収）、237ページ）とされ、なおかつ、「商品の価値を金で表わしたものが、その商品の価格である」（同前、235ページ）とされている。だがマルクスも言うように「価値形態

11) 城座和夫「貨幣の価値尺度機能の意味」（東京都立大学『経済と経済学』52号所収）参照。

12) 飯田「マルクス紙幣理論の体系」36ページ。

のでなければ、所詮は絵空事だと言うほかあるまい。

以上私は、「貨幣は必ず金でなければならないか?」という自らの問に対する解答を求めて、飯田繁氏の所説を検討してみたのであるが、「現代の貨幣はどうしてもこうしてもやはり金でなければならない」という飯田氏の確信に満ちた主張にもかかわらず、その納得のいく論拠はついに何ひとつ見出しえなかった。そしてただひとつわかったことは、要するに飯田氏はマルクスの「価値尺度」論を根拠にしようとしておられるにすぎないのだ、ということだけであった。そこで私は次に、そうした試みがそもそも可能であるのかどうかを確かめるために、マルクスの「価値尺度」論の意味をもう一度——もちろん前稿<sup>14)</sup>とはやや異った角度から——確認してみることにしたいと思う。

は、ただ価値一般だけではなく、量的に規定された価値すなわち価値量をも表現しなければならない」(K. I, S. 67) のであるが、「金の価値をもって諸商品の価値を測定する」ことなしに、いったいどうやって諸商品の価値量を金で表現しようというのであろうか? 今、A商品にx単位の価値が含まれているとして、この価値量を金で表現するのに金何単位をもってすればよいのか? もし金の価値量に関わりなくそれがなしうるのだとすれば、金の価値尺度機能にとって金の価値は直接には関わりをもたない、ということになる。とすればまた、貨幣の価値尺度機能にとって、貨幣自身のいわゆる素材価値は直接には関わりがない、ということではなければならない。こうした見解は飯田氏のそれとまるで両立しえないものだと思うのであるが、飯田氏がこれを黙視されているのは何とも理解し難い。

なお、通説的価値尺度論に対する私の批判的見解については、拙稿「通説的価値尺度論の問題点について——久留間敏造・三宅義夫両氏の所説の検討——」(阪南大学『阪南論集 社会科学編』第20巻第4号所収)を参照されたい。

- 14) 拙稿「マルクスの『価値尺度』論について——宇野弘蔵氏のマルクス批判を手掛りに——」(同前、第20巻第3号、所収)参照。

## 〔Ⅱ〕価値の尺度と交換価値の尺度

### A

前稿でも確認したように、たしかにマルクスは、「諸商品の価値対象性は、どうにもつかまえるようなわからないしろものだ」(K. I, S. 62)ということをも明確にした上で、なおかつ、貨幣の価値尺度機能を、「諸商品の価値量を測定するための尺度となることによって、諸商品の価値量を表現するための材料となる」ことだ、というふうに規定している。そこでは、明らかに、「諸商品の価値量は貨幣の価値量を尺度として測定される」ものとされているのである。だが、くれぐれも注意せよ。それは単にそう仮定されているだけのことなのだ<sup>15)</sup>。マルクス自身が言っているのではない。「貨幣の考察では、商品はその価値どおりに売られるということを仮定した。」<sup>16)</sup>と。「商品はその価値どおりに売られる」と仮定するということは、当然、「商品の価格はその価値どおりである」と仮定するということを含んでいなければならない。そしてまた、「商品の価格はその価値どおりである」と仮定するということは、自ずから、「商品の価値量は貨幣の価値量を尺度として測定される」と仮定するということを前提しているのでなければならない。自明の理なのである。

しかも、周知のように、「諸商品の価値どおりの交換または販売」(K. III, S. 197)という

15) ここではマルクスがそう仮定しているという事実を確認しているだけであって、その事実の評価に触れているわけではない。念のために。

16) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, 3. Band, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 25, S. 203. カール・マルクス『資本論』第3巻、『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻所収(岡崎次郎訳)、243ページ。傍点一引用者。以下、本書から引用する場合には、K. IIIと略記し、*Werke*版原書のページ数とともに各引用文の末尾に付記する(訳文はすべて邦訳『全集』版の岡崎次郎氏の訳による)。

仮定は、何も「貨幣の考察」の際に限られたことではない。まさに『資本論』第1巻・第2巻の全体に亘って貫かれているのである。そしてマルクスがそうしているのは、無論、単純流通ないしは資本主義的生産の内的諸法則を、いわゆる「上向法」に則って純粹に展開するためにほかならない。別ても剰余価値法則の解明はマルクス『資本論』体系の白眉をなすものである<sup>17)</sup>が、その成否を分ける「貨幣の資本への転化」に関して、マルクスはこう言っているのである。すなわち、「貨幣の資本への転化は、商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきであり、したがって等価物どうしの交換が当然出発点とみなされる。」(K. I, S. 180)と。このように、マルクスの理解では、貨幣の資本への転化、ひいては剰余価値法則は、「等価物どうしの交換」を出発点として展開されるべきであり、「等価物どうしの交換」を出発点とすることは、「商品交換に内在する諸法則にもとづ」くことなのである。では、「等価物どうしの交換」を出発点とすることが、なぜ、「商品交換に内在する諸法則にもとづ」くことなのか。マルクスは次のように理解しているのである。

「どの国民も、もし1年とは言わず数週間でも労働をやめれば、死んでしまうであろう、ということは子供でもわかることです。また、いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということも、やはり子供でもわかることです。このような、一定

の割合での社会的労働の分割の必要は、決して社会的生産の特定の形態によって廃棄されうるものではなくて、ただその現象様式を変えうるだけだ、ということは自明です。自然法則は決して廃棄されうるものではありません。歴史的に違ういろいろな状態のもとで変化するものは、ただ、かの諸法則が貫かれる形態だけです。そして、社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとでこのような一定の割合での労働の分割が実現される形態、これがまさにこれらの生産物の交換価値なのです。」<sup>18)</sup>

つまりマルクスは、「いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということ」、したがってそれに対応して社会的総労働が一定の割合で分割されなければならないということ、社会的生産の特定の形態に関わりがない——という意味で——「自然法則」と呼び、「社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態<sup>19)</sup>〔＝商品生産社会〕のもとで」その「自然法則」が実現される形態、これがまさしくこれらの生産物の価値なのだ、と理解しているわけである。「社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとで」は、たしかに「自然法則」は、個人的労働生産物が商品という形態を受け取り、その商品の生産に社会的に必要な労働時間が価値という形態を受け取り、

17) 1867年8月24日付エンゲルス宛書簡の中で、マルクスは次のように書いている。

「僕の本のなかの最良の点は次の2点だ。(1) (これには事実のいっさいの理解がもたづいて) すぐ第1章で強調されているような、使用価値で表わされるか交換価値で表わされるかに従っての労働の二重性、(2)剰余価値を利潤や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているということ。」(マルクス＝エンゲルス『岡崎次郎訳』『資本論書簡(2)』大月書店、1971年、56ページ。傍点＝マルクス。)

18) 同前、162—163ページ。傍点＝マルクス。

19) かかる社会状態の本性を、マルクスはまた次のようにも規定している。すなわち、「諸商品としての諸生産物の交換は、労働を交換し、各人の労働が他人の労働によって定まる一定の方法、社会的な労働または社会的な生産の一定の様式である。」(Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert* (Vierter Band des "Kapitals"), 3. Teil, in Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, 3. Teil, S. 127. カール・マルクス『剰余価値学説史』Ⅲ, 『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻第3分冊所収(岡崎次郎・時永淑訳), 167ページ。)

さらにその価値はまた貨幣の価値を尺度として計量され表現されることによって価格という形態を受け取るばかりでなく、「社会的労働の関連」が貨幣を媒介とする「価値どおりの交換」という形態を受け取る、というふうにして実現されるほかあるまい。

その場合しかし、マルクスは、「自然法則」が（価値法則として）上述の如き連関において直接に実現される、とみているのでは決してない。彼の理解では、資本主義的生産様式は「原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則としてだけ貫かれうるような生産様式」（K. I, S. 117）なのであって、そのような生産様式の下では、「自然法則」（⇒価値法則）は、「私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合をつうじて……たとえばだれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貫かれる」（K. I, S. 89. 傍点一引用者）のである。ところが皮相な観察者の目には、私的諸労働の生産物の交換割合の偶然的な絶えざる変動が映ずるだけであり、かの「自然法則」（⇒価値法則）はそうした変動の単なる結果としてはじめて成立しうるもののように見える。それというのも、「競争では、したがってまた競争当事者たちの意識のなかでは、すべてのことがさかさまになって現われる」（K. III, S. 235）からにはほかならない。だが、実際には、「社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される」ほかない商品生産社会では、「諸商品としての諸生産物の交換は、労働を交換し、各人の労働が他人の労働によって定まる一定の方法、社会的な労働または社会的な生産の一定の様式である」という商品交換の内的本性のゆえに、個人的労働生産物の私的交換が——交換当事者たちの意識の如何に関わりなしに——結局は「価値どおりの交換」（＝「等価物どうしの交換」）に帰着しようとせざるをえないからこそ、私的諸労働の生産物の交換割合は偶然的な絶えず変動するものたらざるをえないのであり、逆にまた、そ

うした「私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合をつうじて」、「無原則性の盲目的に作用する平均法則として」、「価値どおりの交換」（＝「等価物どうしの交換」）が貫かれ実現されることにもなるのである<sup>20)</sup>。

20) 「競争は資本の〔商品交換の〕内的諸法則を執行する。競争はこれを個々の資本に〔交換当事者に〕対置して強制法則たらしめるが、しかしそれを発見する〔erfinden⇒schaffen＝創出する〕のではない。競争はそれを実現するのである。」（Karl Marx, *Grundrisse der politischen Ökonomie*, Dietz Verlag Berlin, 1953, S. 638. カール・マルクス『経済学批判要綱』《高木幸二郎監訳》第4分冊、大月書店、1962年、704ページ。〔 〕内一引用者。）

因に、この点に関して宇野弘蔵氏はこう言われている。すなわち、「もし商品の価値の表現をもって貨幣の価値尺度機能とし、その価格の実現がつねに行われるとすれば、商品の無政府的生産は否定されていることになる。いいかえれば貨幣の価値尺度機能の理解いかんは、商品経済の真髄を把握するか否かということになる。商品経済の無政府性は、無政府性なりに法則性をもつものであることを理解しないと、真に資本主義を理解したことにはならない。」（『宇野弘蔵著作集』第2巻、岩波書店、1973年、213ページ）と。たしかに、氏の言われるとおり「貨幣の価値尺度機能の理解いかんは、商品経済の真髄を把握するか否かということになる。」けれどもそれは、氏の言われるように「商品経済の無政府性は、無政府性なりに法則性をもつものであることを理解しないと、真に資本主義を理解したことにはならない」という意味においては全然なく、「商品経済の無政府性が無政府性なりに法則性をもつものであることを理解したところで、それだけでは真に資本主義を理解したことにはならない」という意味においてである。「商品経済の無政府性が無政府性なりに法則性をもつものであること」は、宇野氏の言われる価格メカニズムの意味ですでに古典派経済学が明らかにしている。しかしそれで「商品経済の真髄」が把握されえたわけではない。そうではなくて、「商品経済の無政府性」が、商品経済が「社会的生産の特定の形態」にはほかならないという点に由来することを理解してはじめて、「商品経済の真髄」は把握されうるのである。さればこそマルクスは、商品経済が「社会的生産の特定の形態」であるということ、すなわち商品経済

こうしてまさしく「諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である」(K. III, S. 197)からこそ、マルクスは、単純流通ないしは資本主義的生産の内的諸法則を純粹に展開すべき場所ではいつでも、「諸商品の価値どおりの交換または販売」を自明のこととして仮定したのである。そして既述のように、そうした仮定は、常に自ずから、「諸商品の価値量は貨幣の価値量を尺度として測定される」という仮定を前提しているのである。当然のことながら、マルクスの「価値尺度」論は、そうしたマルクス自身の設定している方法論的な枠組との関連で理解されるのでなければならない。

## B

マルクスが「一商品の金での価値表現——x 量の商品 A=y 量の貨幣商品——は、その商品の貨幣形態またはその商品の価格である。」(K. I, S. 110. 傍点—引用者)と言うとき、彼は流通の内的な一法則を定立しているのである。価格のかくあることが流通の内的な法則なのであってみれば、貨幣が価値の尺度として機能すること、すなわち「諸商品の価値量を測定するための尺度となることによって、諸商品の価値量を表現するための材料となる」こともまた、自ずから必然でなければならない。言い換えれば、貨幣のかく機能することもまた流通の内的

には内的な諸法則があるということ、を、まず明らかにしているのである。「商品経済の無政府性」はかかる内的諸法則の貫徹(または実現)される様式にはかならないのであってみれば、いわゆる「上向法」に従う限り、「商品経済の無政府性が無政府性なりに法則性をもつものであること」を解明する前に、商品経済の内的諸法則がそれとして予め純粹に呈示されているのでなければならない。マルクスが「商品の価値の表現をもって貨幣の価値尺度機能とし、その価格の実現がつねに行われる」と仮定しているのはそのためであって、そのことを以て「商品の無政府的生産は否定されていることになる」などと解するのは、とんでもない見当違いなのである。

な一法則なのである<sup>21)</sup>。だが、くれぐれも注意せよ。そうしてマルクスによって描かれる内的諸法則の世界は、マルクスによって暴き出された「秘密」<sup>22)</sup>の世界なのだ。「秘密」は隠れているからこそ「秘密」なのであり、内的諸法則は、それが単純流通ないし資本主義的生産の外的な運動のうちにそのままの姿で現われることがないからこそ、内的諸法則なのだ。

これに対して、単純流通ないし資本主義的生産の現実の運動の世界は、流通当事者なり資本家なりの意識的な行為に媒介された「競争」の世界である。と言うのは——と言うまでもないが——、単純流通ないし資本の現実の運動は流通当事者なり資本家なりの意識的な行為の所産にはかならず、彼らのそうした行動は彼らの間の「競争」として総括されうるからにほかならない。先に私は「皮相な観察者の目には、私的労働の生産物の交換割合の偶然的な絶えざる変動が映ずるだけ」だ、と述べたが、彼が皮相な観察者であるのは、現実の運動(例えば私的諸労働の生産物の交換割合の偶然的な絶えざる変動)の下に隠れている「秘密」を洞察しえない限りでのことであって、彼の目が、例えば私的諸労働の生産物の偶然的な絶えざる変動をそれとしてとらえ、そうした変動が「等価物どうしの交換」に導く傾向をもっていると見てい

21) なお、念のために付言しておけば、同じ内的諸法則の世界の中でも、平均利潤法則の段階では、貨幣はもはや価値の尺度としては機能しない。単純流通の段階や剰余価値法則の段階では、社会的労働の配分は直接単純に労働の配分として行われるのであり、したがって「価値どおりの交換または販売」が仮定されうる。したがってまた、そこでは、貨幣は価値の尺度として機能しうる。しかし、平均利潤法則の段階では、社会的労働の配分はもはや直接単純に労働の配分としては行われえず、利潤率を基準とした資本の配分を介してのみ行われうるものとなる。そのためこの段階では、貨幣は価値の尺度としては機能しえず、交換価値の尺度としてのみ機能しうるのである。

22) 「労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている秘密なのである。」(K. I, S. 89.)



ること自体は、(現実の「競争」の世界)が現にそうあるのだから)皮相どころか至極真なことなのである。

もちろんマルクスの慧眼は、資本主義的生産の現実の運動の下に価値法則という「秘密」の隠れてあることを洞察した。そして彼は、自らの発見した「秘密」の世界を、『資本論』として鮮やかに描いて見せた。けれどもマルクスは、その「秘密」の世界と現実の「競争」の世界とを無媒介に結びつけるような愚か者ではなかったし、「秘密」の世界を暴き出せば能事終われりとするような怠け者でも無論なかった。彼は「競争の科学的な分析は資本の内的な本性が把握されたときにはじめて可能になる」(K. I, S. 335)と考えていたのであって、それゆえにまず「秘密」(＝資本の内的な諸法則)の世界を解明したのである。彼の構想では、その後で「資本主義的生産の内在的諸法則が諸資本の外的な運動のうちに現われ競争の強制法則として実現されたがって推進的な動機として個別資本家の意識にのぼる仕方」(ebenda. 傍点—引用者)の解明がなされ、「もろもろの関連が世界市場、その景気変動、市場価格の運動、信用の期間、産業や商業の循環、繁栄と恐慌との交替をつうじて生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らに無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方」(K. III, S. 839. 傍点—引用者)が論定されるはずであった<sup>23)</sup>。そしてそうした手続きを経てはじめて

て、現実の「競争」の世界の科学的な分析が完成するはずだったのである。

然るに、何とも不思議なことに、マルクスの案内によっていったんその「秘密」の世界を覗いた者の目には、現実の「競争」の世界さえもが「秘密」の世界とぴったり重なり合って見えてしまうらしいのである。例えば、久留間鮫造氏はこう言われている。すなわち、「商品の価値が他商品の使用価値で表現されるということは、われわれが日常の経験から直接に確認しうる明白な事実である。」<sup>24)</sup>と。「商品の価値が他商品の使用価値で表現される」という「秘密」の世界の出来事が、現実の「競争」の世界の「日常の経験から直接に確認」されうると言われるわけだ。もちろん私は、久留間氏ほどの達人の域に達すれば、現実の「競争」の世界がそのまま「秘密」の世界に見えるということもあるいはあるのかもしれない、ということをあえて否定するだけの自信を持たない。けれども、「われわれ」はなべて凡人なのであり、「競争では、したがって競争当事者たちの意識のなかでは、すべてのことがさかさまになって現われる」のはどうしようもないことなのである。だからこそマルクスも言うわけだ。「生産物交換者たちがまず第1に実際に関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である。」(K. I, S. 89. 傍点—引用者)と。ここに言われている「自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか

23) 周知のようにマルクスは、『資本論』の課題と方法について、次のように述べている。

「生産関係の物化の叙述や生産当事者たちにたいする生産関係の独立化の叙述では、われわれは、もろもろの関連が世界市場、その景気変動、市場価格の運動、信用の期間、産業や商業の循環、繁栄と恐慌との交替をつうじて生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らに無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方には立ち入らない。なぜ立ち入らないかと言えば、競争の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって、われわれはただ資本主義的生産様式の内的編

成を、いわばその理想的平均において、示しさえすればよいのだからである。」(K. III, S. 839.)

こうした文言に示されているようなマルクスの方法については、高須賀義博『マルクスの競争・恐慌観』(岩波書店、1985年)が有益な考察を展開している。参照されたい。

24) 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、53ページ。かかる見解が飯田繁氏によっても共有されているであろうということは、すでに見たところから容易に察せられるであろう。

……という問題」とは、とりもなおさず「交換のための諸物の有用性」(K. I, S. 103)の量的規定性の問題にほかならず、したがって交換価値とその大きさの問題にほかならない。然るにマル経貨幣論には、「交換のための諸物の有用性」という規定における交換価値の概念が決定的に欠如しているのである。それというのも、マル経貨幣論においては、「交換価値は価値の現象形態である」という命題が「秘密の世界」における価値形態論との関連でのみ理解され、「競争の世界」においては「価値が交換価値として現象する際には交換当事者たちの意識が介在しているのだ」という自明のことが閑却されてしまうからにはかならない<sup>25)</sup>。

「競争の世界」では、人々は商品の価値など直接には意識すべくもないのであって、意識

すべくもないものをまた表現すべくもないこと、自明なのである。「競争の世界」においては、商品の価値性格は「交換のための有用性」(＝交換価値性格)としてのみ意識される<sup>26)</sup>。「競争の世界」の住人がひたすら交換価値の大きさにのみ「まず第1に実際に関心をもつ」のはそのためなのである。それゆえまた彼らは、諸商品の交換価値の大きさを一般的に表現するために、貨幣をば交換価値の一般的な尺度として用いなければならない。かくて「競争の世界」では、諸商品の交換価値の大きさが、貨幣の交換価値を共通の尺度とすることによって、評価され表現される。そこでは価格は、直接には何ら価値の貨幣表現たるものではなく、直接にはただ交換価値の貨幣表現たるものでしかないのである<sup>27)</sup>。

25) 逆に言えば、宇野弘蔵氏が例えば「もともと一商品の価値が他の商品の使用価値で表現されるということは、単に使用価値を異にする他の商品によって価値が表現されるというのではなく、一商品の所有者が、己れの欲する商品の一定量に対してならば、これこれの量の、その商品を引渡してもよいという意志表示をなすものであって、等価形態にある商品は、その使用価値によって需要せられているのである。」(『宇野弘蔵著作集』第9巻、岩波書店、1974年、180ページ)と言われるとき、そこには、たしかに一面の真理が含まれているのである。けれども宇野氏は、こう述べられることによって実は、「秘密の世界」の言葉を用いて「競争の世界」について語る、という誤りを犯しておられるのだということに気づかれていない。上の文章は、そこで用いられている「価値」という用語を交換価値という用語に置き換えることによって始めて、十全な意味をなすものとなるのであって、しかもそのことによって同時に、宇野氏の表象に思い浮かべておられる「世界」とマルクスの問題にしている「世界」との位相の違いも、明白になるであろう。

なお、本稿におけるとはまた別の視角からではあるが、「交換価値」の概念の意義を改めて強調しようとする試みとして、小林彌六『価値論と転形論争』(御茶の水書房、1977年)第6章、がある。小林氏の所説は、いわゆる「宇野派」流通論の本質的な一面を照射している、と言ってよいであろう。

26) ある商品の交換価値とは、要するにその商品の「交換のための有用性」の謂にほかならず、その商品と引き換えらるべき(または引き換えられる)商品の量において量的規定性をもつにすぎないのだから、それは、労働生産物のみならず、およそ売買される(または売買されると仮定された)すべての事物に帰属しうる。それゆえまた、労働生産物のみならず、およそ売買される(または売買されると仮定された)すべての事物が、それぞれの交換価値の大きさを、貨幣の交換価値を尺度として評価し表現することによって、価格をもちうる。かくてマルクスも言う。「それ自体としては商品ではないもの、たとえば良心や名誉などは、その所有者が貨幣とひきかえに売ることのできるものであり、こうしてその価格をつうじて商品形態を受け取ることができる。」(K. I, S. 117)と。

27) 前掲拙稿において私は、マルクスの「価値尺度」論を合理的に理解するためには、「法則レベル」の価格(法則を論じる際にマルクスが常に仮定している『価値どおりの交換または販売』に対応するところの「価値どおりの価格」と現象レベルの価格(価値と価格の乖離を問題にする際に常に意識されている具体的な実際の売買価格)との区別(前掲拙稿「通説的価値尺度論の問題点について」76ページ)がぜひとも必要である、ということを繰り返して強調したのであるが、本稿においては、見られるとおり、「法則レベル」を「秘密の世界」(＝内的諸法則の純粋に展開される世界)

## む す び

以上の考察を経てようやく、われわれは、「貨幣は必ず金でなければならないか?」という問いに、一応解答をなしうるところまで来れたようである。そこで以下、これまでの論述の要点を整理しつつ、ひとまず結論を出してみることしよう。

この小論の冒頭においてわれわれがまず確認したことは、マル経貨幣論においては「貨幣は必ず金でなければならない」という命題が、一種の定理として扱われているという事実であった。そこでわれわれは、「労働生産物が商品形態をとる限り、貨幣はあくまでも金でなければならない、というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ」と主張される飯田繁氏の所説に沿って、氏が——のみならず、マル経貨幣論において一般に——「貨幣は必ず金でなければならない」とされる論拠をたずねてみた。その結果わかったことは、そこにはたしかに、「貨幣を貨幣たらしめる機能は価値尺度機能である→価値尺度機能を果たしうるものはそれ自体十分価値をもつ特定の一商品だけである→貨幣は必ず特定の一商品でなければならない→貨幣が必ず特定の一商品でなければならない以上歴史的必然として貨幣は必ず金でなければならない」というふうな論理構成の試みが見られるのではあるが、そうした論理構成の試みも結局はマルクスの「価値尺度」論の上に（言わば）胡座をかいているにすぎず、肝心の「価値尺度」の概念を曖昧にしたままであるために、何ら成功していない、ということであった。

かくして問題は、マルクスの「価値尺度」論

に、「現象レベル」を「競争の世界」（＝単純流通ないしは資本主義的生産の現実の運動の世界）に、それぞれ言い直してみた。私としては、本稿における表現（と、それに伴う問題のとらえ方）の方が正確であり、それだけに私の言いたいこともいっそう明確に把握していただけるのではないかと思っている次第である。

をどう理解すべきか、ということに帰着した。そこでわれわれは次に、マルクス「価値尺度」論の方法（ひいてはマルクスの経済学の方法）を再確認することに向かった。その結果わかったことは、たしかにマルクスは貨幣の第1の機能として価値の尺度たる機能を規定しているけれども、それは、単純流通ないしは資本主義的生産の内的諸法則を純粹に展開すべき「秘密」の世界”でのこととしてであって、マルクス自身は、そうした「秘密」の世界”と単純流通ないしは資本主義的生産の現実の運動の世界たる「競争」の世界”とを——少なくとも方法論としては——厳密に区別している、ということであった。彼の理解によれば、現実の「競争」の世界”は、「秘密」の世界”が競争当事者たちの意識（ないしは意識的行為）に媒介され、転倒して現われたものにほかならない。「競争」では、したがってまた競争当事者たちの意識のなかでは、すべてのことがさかさまになって現われるのである」（K. III, S. 235）。

ところが、マル経貨幣論においては、「秘密」の世界”と現実の「競争」の世界”との区別が判然としない。そのため、マルクスが「秘密」の世界”について語っていることを、あたかも現実の「競争」の世界”についてもそのままではまるものであるかの如くに受け取ってしまい、その結果、自らが、「秘密」の世界”の言葉を用いて「競争」の世界”を語る、という誤りを犯すに至る。

たしかに、「秘密」の世界”では、貨幣はまさしく価値の尺度として機能するのでなければならない。けれども「競争」の世界”では、諸商品の価値性格は、それとしては意識されうべくもないのであって、ただ単に「交換のための有用性」＝交換価値性格としてのみ意識されるほかないのである。とすれば、「競争」の世界”において貨幣が交換価値の尺度として機能することは、何ら怪しむに足りない。「競争」の世界”において「生産物交換者たちがまず第1に実際に関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られる

か」という問題であり、彼らにとっては彼らの生産物が「直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段である」(K. I, S. 100)にすぎないものとすれば、彼らが自分たちの生産物の交換価値をこそ評価し表現すべきであることは自明であり、そうした評価・表現に際しては貨幣の交換価値が尺度となることも、また自明だからである。

ところで、こうして“「競争」の世界”では、貨幣は交換価値の尺度として機能し、“諸商品の交換価値の大きさを評価するための一般的な尺度となることによって、諸商品の交換価値の大きさを表現するための材料となる”ものとすれば、貨幣のかかる機能がそのいわゆる素材価値とは直接の関係をもたないということも、やはり多言を要しないであろう。たとい貨幣が現に金であろうとも、現実の“「競争」の世界”における価格は、金の交換価値(＝いわゆる貨幣の「購買力」)を尺度として諸商品の交換価値を評価し、応分の金量として諸商品の交換価値の大きさを表現するものとしてあるにすぎないのであって、金の価値そのものは、金の交換価値の「現象的な運動の下に隠れている秘密」たるに相応しく、金の交換価値の大きさを「盲目的に作用する平均法則」として規制するにすぎないのである。逆に、たといそれ自体としては無価値なものであらうと、それが現に交換価値を有している限りでは、“「競争」の世界”に固有の交換価値の尺度たる機能を果たすことができ、したがって、その限りで(“「競争」の世界”の)貨幣たりうる。それ自体としては無価値であるにもかかわらず現に交換価値を有するものが貨幣である場合と、金が貨幣である場合とで、交換価値の尺度としての貨幣の機能そのものに直ちに何らかの違いが生じるわけでは決していない。両者の違いはただ、金の交換価値の大きさは金の価値という内的規準を備えているのに対して、それ自体としては無価値であるにもかかわらず現に交換価値を有しているものの交換価値の大きさには、当然のことながらその

ような内的規準が備わっていない、ということだけなのである。

かくして残された最後の問題は、“それ自体としては無価値なものが現に通貨として交換価値を有しているとしても、それはやはり金の代理としてではないのか”，という問題である。現代の銀行券がそれ自体としては無価値であるにもかかわらず現に交換価値(＝いわゆる「購買力」)を有していることは、何人たりとも否定しない明白な事実である。されば、「現代の貨幣がどうしてもこうしてもやはり金でなければならない」と主張しうるためには、“現代の銀行券が交換価値をもっているのは金の代理としてにすぎない”，ということを示すのでなければならない。しかもそれは、玄学の問題などでは少しもなく、至って平凡な単なる事実確認の問題にすぎないのである。

とはいえ、何人といえども、“現代の銀行券が交換価値をもっているのは金の代理としてにすぎない”ということを示す、事実を以て証明することはできないであらう。実際、そんな証拠はどこにもないのである<sup>27)</sup>。それゆえ人は、マルクスの貨幣発生論やマルクスの「価値尺度」論に依り拠を求めてゆく。そしてそれとともに人は、マルクスは“「秘密」の世界”を暴き出しているのだ、ということを見過してしまう<sup>28)</sup>。

たしかにマルクスは、単純な商品の分析から出発して、単純な諸商品の交換から貨幣が発生する所以の論理を明らかにした。商品交換の中から排他的に一般的等価形態に立つ商品として

27) 岩野茂道『ドル本位制』熊本商科大学海外事情研究所、1977年、同『金・ドル・ユーロダラー——世界ドル本位制の構造——』文眞堂、1984年、参照。今日金は貨幣でないという事実を強調される限りでは、岩野氏の所説は私には極めて説得力あるものに見える。

28) もっとも、公平のために言えば、それは、あながちマルクス自身にも責任のないことではない。高度に抽象的な論理レベルに極めて具体的な関係をしばしば持ち込んでいることは、否定し難い事実だからである。けれども、少なくとも方法論としてはマルクス自身明確であることは疑いない。

貨幣は発生するのであるから、その限りでは貨幣が特定の一商品たらざるをえないのは当然である。そこには、それ自体としては無価値なものが価値あるものと交換されるなどという関係は、もともと存在しえない。これまた当然のことである。けれども、貨幣がかく発生するということ、あるいは貨幣の発生は論理的にはかく説かるべしということと、貨幣が今日かくあるということ、あるいは貨幣は今日かくあるべしということとは、必ずしも同じことではない。しかも繰り返し述べてきたように、「『秘密』の世界」がそのまま現実の「『競争』の世界」であるわけでは全然ないのである。

「『秘密』の世界」においては貨幣は特定の一商品であり価値の尺度の機能を果たす、ということは、現実の「『競争』の世界」がいかに変容しようとも、そのこととは何の関わりもない。『資本論』は、それが単純流通ないしは資本主義的生産の内的諸法則を純粋に展開している限りでは、それ自体において完結しているのである。言うまでもなく、変容するのはただ内的諸法則の貫徹（または実現）される様式だけなのだから。しかしそのことは、もちろん、現実の「『競争』の世界」がいかに変容しようともよい、ということの意味するものではありえない。それは当然それ自体としてとらえられ分析されなければならないのである。

現実の「『競争』の世界」は資本主義の歩みとともに段階的に変容してきたのであって、貨幣としてその例外ではない。現実の「『競争』の世界」においては、貨幣は交換価値の尺度として機能しなければならないのであるが、交換価値自体は何も労働生産物にのみ帰属するものではない。それゆえ「『競争』の世界」においては、たといそれ自体としてはいかに無価値なものであろうと、それが現に交換価値を有している限り、交換価値の尺度として機能しうるのであり、したがってまた貨幣たりうるのであって、事実、現代の銀行券は、「金の代用物」としてでは全然なく<sup>29)</sup>、まさにそれ自身が貨幣たるものとして、現に交換価値を有し、交換価値

の尺度として機能しているのである。かくて、“貨幣は必ずそれ自体十分価値をもつ特定の一商品でなければならない”とは言えず、ましてや「貨幣は必ず金でなければならない」などとは到底言えない、ということは全く明白なのであるが<sup>30)</sup>、それにもかかわらずマル経貨幣論が、「貨幣は必ず金でなければならない」と頑に主張して止まないのは、マルクス「価値尺度」論の抽象性を看過した結果として自らが造出するに至ったあの鵠の如き価値尺度概念によって、自らを呪縛してしまっているからにほかならないのである。

29) 井汲明夫氏は最近の労作「試論——紙幣流通と価値表現」（城西大学『城西経済学会誌』第21巻第2・3号所収）において、「今日のような紙幣の排他的流通下では、紙幣ははたして金章標であるのか否かが、改めて問い直されなければならない」（71ページ）とされ、かく問い直された結果、“紙幣は金章標ではなく貨幣章標である”という結論に到達されている。氏の労作には学ぶところも多いが、それにもかかわらず、氏が、「紙幣流通と価値表現」という表題にも示されているように、本稿で言うところの「『競争』の世界」と「『秘密』の世界」との方法論的な区別と連関を明確には意識されていないために（と思われる）、結局は、価値・価値尺度・価値表現というような基本的なカテゴリー（ないし概念）を曖昧に処理されることによって問題解決を図られていることについては、根本的な疑問を禁じえない。しかし、井汲氏の所説の詳細な検討は別の機会を待ちたい。

30) 念のために言えば、政策論についてはこの限りでない。けれども、もちろん、マル経貨幣論において「貨幣は必ず金でなければならない」と主張されるのは、単なる政策論としてではなく、「マルクス貨幣理論の帰結」たるものとしてであり、今日の貨幣的諸問題を解明する際の基準原理としてなのである。

（昭和61年2月21日受理）